

かぎ針編みの学習意識と上達からみる家庭科の 製作題材提案に関する研究

川 端 博 子 埼玉大学教育学部生活創造専修家庭科分野
中 谷 俊 裕 埼玉大学教育学研究科平成26年度修了生

キーワード：かぎ針編み、達成感、動作解析、上達、中学生

1. はじめに

平成24年度より中学校技術・家庭科において、布を用いたものづくりが必修となり、学習目標の達成を後押しする製作題材が模索されている。平成10年告示の中学校技術・家庭科の学習指導要領より手芸が教育課程から削除されて以来、「編む」の内容は位置づけられていない¹⁾。編み物は編み針と毛糸の簡単な用具と限られたスペースで実施でき、生徒に応じて内容に変化をもたせることができる。編み物は、趣味として子どもの遊びとして日常的に行われてきたものの裁縫と同様、体験の機会は少なくなっているが、手指の巧緻性を向上させる観点²⁾からも検討に値する製作活動と考える。

平成20年9月の中学校学習指導要領解説 技術・家庭編の家庭分野³⁾には、「布を用いた物の製作」と記載されるが題材指定はされていない。教科書に編み物の製作は記載されていないが学校現場では授業に取り入れられており、かぎ針編みでアクリルたわし作りを作る中学校の授業実践では、得意意識に男女差はなく編み物に興味を抱く⁴⁾、楽しそうに取り組んでいる⁵⁾と報告されている。一方で、時間を要し難しいことを理由に指編みを提案する報告⁶⁾もみられる。技能面については、レース編みのくさり編み作業について熟練者と未熟練者の手指の動きを比較した研究⁷⁾、指導による習熟経過の分析⁸⁾がみられるが、半世紀以上を経過して生徒の実態は変化しており、毎日15分の練習を6ヶ月継続させた観察は学校教育の現況に即さない。

本研究では、編み物の中でも進行度の速い並太アクリル糸を用いたかぎ針編みに焦点を当て、初心者でも編み物の上達が見込め作品が完成に至るか、授業を通して生徒はよい体験をしたかの2点を確認する。併せて、家庭科の教員免許状取得を希望する大学生の経験とくさり編みの上達度を参考資料としながら、かぎ針編みが中学生の学習にふさわしいか考察する。

2. 研究方法

1-1 質問紙調査

(1) 中学生の編み物の経験と学習意識

2014年10月に埼玉県内の公立中学校の1年生6クラス214名（男女各107名）を対象に編み物の経験・授業の意識に関する質問紙調査を行った。協力中学校では、技術・家庭科で1学期の後半から2学期前半にかけての6時間を「布を用いた物の製作を通して、生活を豊かにするための工夫ができる」を学習目標とし、かぎ針編みでアクリルたわしを製作している。完成後、家庭に持ち帰らせて、アクリルたわしとスポンジで食器を洗い比べる課題を出し、7時間目にはレポート

をもとに意見を共有し、環境に配慮した食生活の工夫について考えさせている。

本単元を終了後、編み物の経験、授業後の満足度および難易度の意識を調査し、教材としての適性および指導に必要な留意点を考察する。質問紙の内容は、①授業前の編み物の経験の有無とその場所（複数回答）、編み方の種類（棒針編み、かぎ針編み、指編み、その他から複数回答）、②授業で体験したかぎ針編みの楽しさの程度とその理由（自由記述）、作品の出来上がりの満足度、今後への取り組み意欲の程度を4件法（4. そうである 3. ややそうである 2. あまりそうでない 1. そうでない）で尋ねた。③上達度の自己評価として、くさり編み、細編み、編み目が揃う、リズムカルに編むについてそれぞれ以下の1～4（4. すぐできるようになった 3. 割とすぐできるようになった 2. できるまでに時間がかかった 1. 今もできない）から回答させた。

(2) 大学生の編み物の経験と意識

若手教師の実態を考察するために、中学校・高等学校家庭科教員免許状取得希望の埼玉大学教育学部の学生73名（男子6名、女子67名）を対象に2012年10月と2014年10月に質問紙調査を実施した。質問紙の内容は、①中学・高校での学習体験の有無、有りの場合には編み方の種類（複数回答）および製作物（自由記述）、②授業以外での編み物の経験の有無とその場所および編み方の種類、③くさり編み・長編み・細編みのうちできるもの（複数回答）、④編み物に対する興味関心の有無である。

1-2 大学生のくさり編みの観察

(1) くさり編みの技能測定と被験者の選定

かぎ針編みの基礎であるくさり編みの目数から大学生の技能レベルを把握することを目的とし、質問紙記入の大学生のうち34名（全員が右利き）より、くさり編みの技能測定の協力を得た。並太アクリル糸、4-6号かぎ針、くさり編みのやり方を示したプリントを配付した。くさり編みのやり方を説明する動画⁹⁾をスクリーンに投映して全体にやり方を説明した。1分間の練習後に質問を受けた後、5分間に完成させたくさり編みの目数をカウントした。

編み目数をもとに被験者7名（熟練者2名、未熟練者5名）を選定した。未熟練者5名には上達傾向をとらえる実験への参加を依頼した。

(2) かぎ針と手指の動きの観察

熟練者2名は1回、未熟練者5名は1週間程度の期間をおいてくさり編みの練習を3回実施した。未熟練者には毎回、必要に応じてやり方とくせを正す個別指導をしてから1分間の練習後、5分間くさり編みをさせた。

1回目は、熟練者との比較をもとに未熟練者の技能の特徴をとらえた。未熟練者における2回目・3回目は編み方の上達を観察した。

図1には手指とかぎ針の動作解析の計測点を示した。被験者には、かぎ針編みをする時に手指の動きを妨げない位置、すなわち左右両手の母指・示指・中手指・橈骨手根などの関節12か所とかぎ針の末端部⑬にマーカーを設置し、かぎ針の先端⑭は手追いで位置をとらえることとし、①～⑭を計測点に定めた。

熟練者は、追跡処理の関係から速度を緩め、未熟練者は各自の速度でくさり編みを行った。この間の手指とかぎ針の動きを、図2に示すように真上に設置したデジタルカメラにより1秒間30

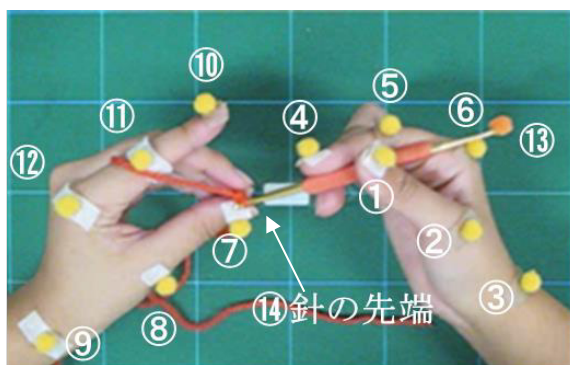


図1 手指とかぎ針の動作解析の計測点

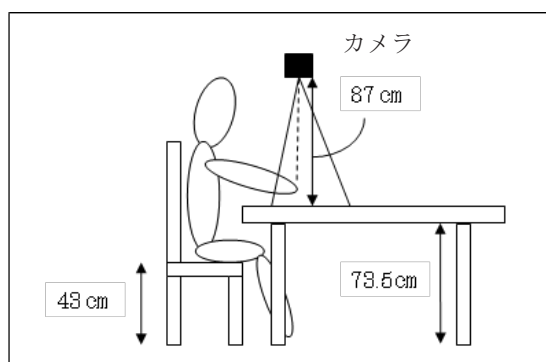


図2 撮影条件

コマでビデオ撮影した。この中から編み方が安定し、連続している3目分を抽出し、2次元動作解析ソフト（Move-Tr/2D 7.0 Version7.60 (株)ライブラリー）を用いて、計測点の位置（座標）をとらえた。

解析は以下の3点とした。1. かぎ針の動きとして⑬と⑭の軌跡と回転角度、2. 左右の手指の動きとして右手マーカー①～③と左手マーカー⑦～⑩⑫の軌跡と移動距離、3. 両手指の動きの共応性として、両手母指の①と⑦の2点間距離である。

(3) 編み目の評価（目数と揃い方）

編み目の量的な評価として、5分間に完成したくさり編みの目数（熟練者2サンプルと未熟練者の1回～3回目の15サンプル）をカウントした。質的な評価として、くさり編みの末端に一定荷重（6.1gのクリップ）をかけた状態で中央付近の編み目3目分の長さを5か所で計測し、5か所の標準偏差を編み目の揃い方とみなした。さらに研究者が全17サンプルを平置きし、編み目の美しさを目視により順位をつけた。（1点：最も低い評価～17点：最も高い評価）

くさり編みの量的・質的评价より熟練者・未熟練者の比較および未熟練者の練習後の上達について考察する。

3. 結果および考察

2-1 質問紙調査から考察する意識と実態

(1) 中学生の編み物の経験と学習意識

授業以外で編み物の経験がある中学生は214名中94名（44.2%）で、内訳は男子30名（28.0%）女子64名（60.4%）となり女子が有意に高い割合であった。体験した場所は、家66件、小学校23件、学童14件、幼稚園・保育園11件、児童館など8件があげられた。編み方の種類は、指編み42名、かぎ針編み41名、棒針編み32名、その他・不明が14名となった。全体として経験者の割合は高くないが、家庭での体験が最も多く、次に学校、学童や幼稚園・保育園の順となったことから、小学生や園児の遊びに取り入れられていると考えられる。

図3は、授業への意識と上達度の自己評価の回答をまとめたものである。「授業で編み物を楽しいと感じた」「作品の出来上がりに満足している」では8割程度がそうである、ややそうであると回答していることから、編み物に好印象を抱いたとみなされる。しかし、「今後、作品づくりをしたい」に肯定的に回答した者は6割を超える程度であり、今後の取り組み意欲は十分とはい

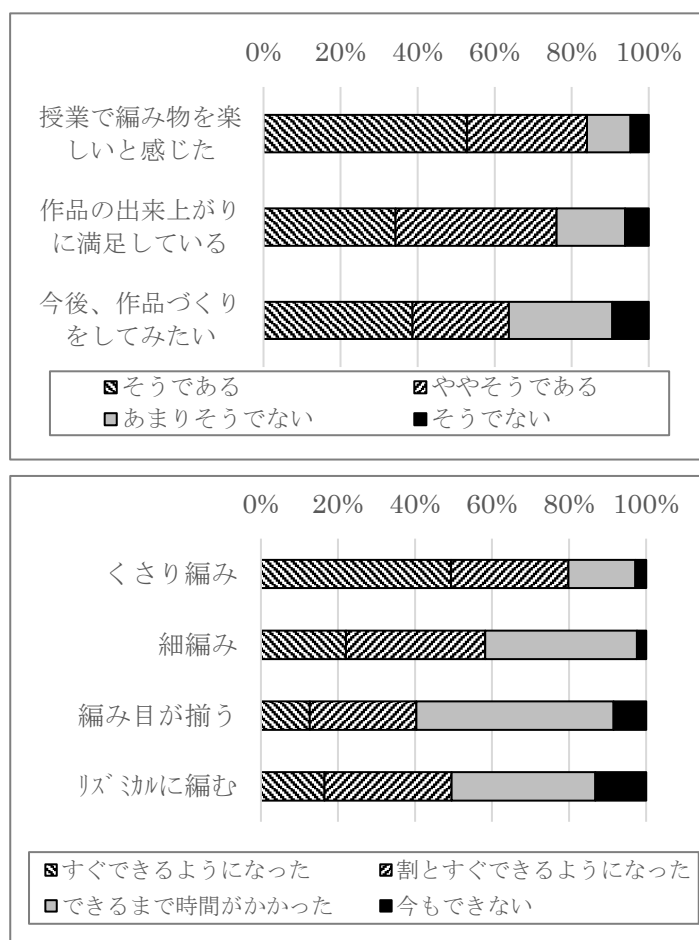


図3 授業への意識と上達度の自己評価（中学生）

となり、経験者の方が高い割合であった。学習を繰り返すことも上達意識と今後の取組みに結びつくと考えられる。今後も作品づくりをしてみたい意識は、楽しさや満足度に比べて低い割合となっていることから、繰り返しての経験・学習が求められるといえよう。

図3の下方に示した上達度の自己評価では、くさり編みはすぐできるようになった、割とすぐできるようになったと8割が回答しているが、「細編み」、「リズムカルに編む」、「編み目が揃う」の順に肯定度は低下し、すぐの上達に至らないが徐々に上手になると感じて9割程度ができるようになったと自己評価している。

授業で編み物をあまり楽しくない・楽しくないと否定的に回答した生徒34名（全体の15.6%）に目を向けると、くさり編み6名、細編み4名、編み目が揃う11名、リズムカルに編む15名が今もできないと回答しており、未習得が否定的意識を抱く原因に結びついている。

図4は授業で編み物を楽しい・やや楽しいと肯定的に回答した生徒とあまり楽しくない・楽しくないと否定的に回答した生徒に分けて、その理由と記載件数を示したものである。肯定的な生徒の理由には、おもしろいに続き、だんだん出来るようになる、達成感がある、完成までの過程を目で見てとれるなどが多く記載された。これらは編み物の学習の効果ととらえられ、刺し子学習の報告結果と一致する点が多い¹⁰⁾。否定的な理由には前述と同様、難しい、面倒である、やり直したが挙げられている。できない生徒に対しては繰り返しの示範や個別指導が必要である。

以上のことから、本調査対象の多数の中学生は、かぎ針編みを楽しみ、満足と思う作品を完成

えない。3項目間の相関係数は、楽しいと感じた×出来上がりに満足 ($r=0.385$, $p<0.01$)、楽しいと感じた×今後、作品作りをしてみたい ($r=0.683$, $p<0.01$)、出来上がりに満足×今後、作品作りをしてみたい ($r=0.281$, $p<0.01$) であることから、生徒たちは授業で楽しく取り組めたと思うほど今後の継続に結びつく可能性が高まるといえる。

授業への意識を男女と授業前の経験の有無でクロス集計すると、男子の方で否定的な傾向となり全3項目で $p<0.05$ または $p<0.01$ で有意差が認められた。経験の有無では、「作品の出来上がりに満足している」の比率のみ有意差はみられなかったが、それ以外のすべてで、経験ありの者が肯定的で $p<0.01$ で有意差が認められた。満足度において有意差はみられないものの、経験者の満足度（そうである、ややそうである）が80.6%に対し未経験者では72.2%

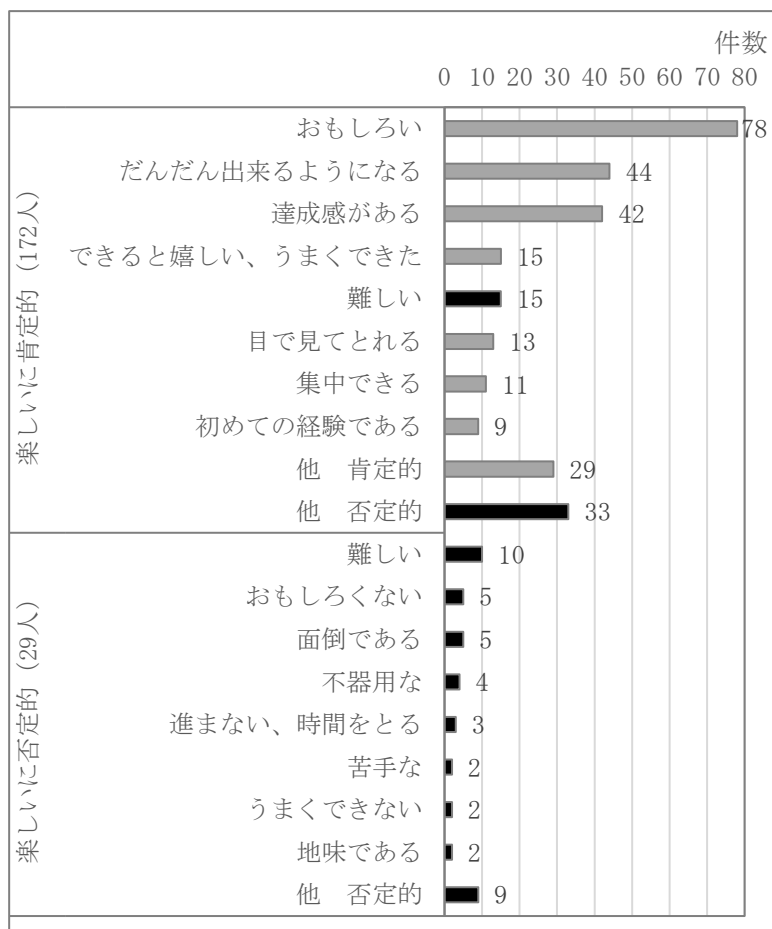


図4 編み物を楽しい・楽しくないと感じた生徒の理由とその記載件数（中学生）

編み方の種類は棒針編み32名、かぎ針編み32名、その他指編みなど4名となり、製作物にはマフラー36件、モチーフ・コースター9件、巾着4件など総計67件が挙げられた。初めて編み物をした場所は、家庭39件、学校12件、その他（学童など）4件、不明2件となり、家庭での取り組みが最も多い。

編み物の未経験者が16名（21.9%）いることから、編み物を体験したことのない若手の家庭科教師が一定割合でいると推察される。また、かぎ針の基本編みについて、「できる」の回答はくさり編み26名（35.6%）・細編み5名（6.8%）・長編み7名（9.6%）と低いため、経験があっても編み方の知識ややり方が定着しない者がいると推察される。

編み物への興味関心は、あり61名（83.6%）なし11名（15.1%）不明1名（1.3%）となった。経験者の興味関心は、未経験者に比べて有意（ $p < 0.05$ ）に高い傾向であることから、経験することで興味を引き出せると考えられる。

以上のことから、家庭科免許取得希望の大学生の2割超は編み物の経験を有しておらず、経験者においても編み方の技能・知識は十分でなく、約15%は興味関心を抱いていない現状であることから、若手教師には編み方指導の技能が十分でないと考察される。今後、指導者がまず編み物で楽しさを体験し、正しいやり方を習得することが求められる。

できたと自己評価している。最終的に全員が作品を提出したことから、中学1年生でもこなせる題材であると考えられる。

(2) 大学生の経験と技能実態

大学生が、家庭科で編み物を学習したと回答した人数とその割合は、あり9名（12.3%）、なし56名（76.7%）、不明8名（11.0%）となった。授業での体験割合は少ないものの、家庭科の授業が体験のきっかけとなっている者もいる。9名の回答からは、棒針編み6名、かぎ針編み2名、指編み1名で、製作物としてはマフラー5件、たわし3件、帽子2件が挙げられた。

授業での学習を含めた編み物の経験者は57名（78.1%）である。自発的に取り組んだ

2-2 かぎ針編みの技能実態

(1) 大学生の技能と被験者の選定

図5は、大学生が5分間に完成したくさり編みの目数を25刻みでその人数分布を示したものである。編み目数は、最小1、最大414、平均103、標準偏差94となった。このように教師予備群の大学生の技能には個人差の大きいことが示された。

編み目数をもとに、熟練者群（326個以上）として2名A、B、経験者群（101以上225個以下）として3名a、b、c編み物の未経験である初心者群（100個以下）d、eの7名を被験者に選定した。以降、a～eを未熟練者と記載し、手指とかぎ針の動きを熟練者と比較する。

(2) 熟練者と未熟練者の手指の動きの特徴

1) かぎ針の動き

図6はかぎ針先端部⑭と末端部⑬における1目分の軌跡を熟練者A、B、未熟練者a、eの例を示したものである。同図の左下には、全被験者の針の回転角度を表にまとめた。

以下、1回目の結果について考察する。熟練者2人の針の動きは似ており、針の先端1/4付近を基点とし先端部と末端部が扇状になっている。2次元の解析のため針の長さが異なって示されるが、同図の表に示した熟練者のかぎ針の最大角度は、72°程度となり、針を大きく回転させ、軌跡からは規則な動きがみられる。

未熟練者では、かぎ針の先端・末端の軌跡は熟練者のような規則性が見受けられず、かつ個人差が大きい。aでは先端・末端の軌跡がともにスムーズでなく、かぎ針の針の角度が右上がり、回転角度は30.2°と少ない。eでは針の回転角度は55.8°と大きい基点が定まらず、何度も針先に糸を掛けて引き抜こうとしている。そのため、かぎ針の先端が不安定になり、それに同期する針の末端も動きが定まらない。

2) 左右の手指の動き

図7は、右手マーカー①～③と左手マーカー⑦～⑩、⑫の3目分の軌跡を熟練者A、B未熟練者a、eについて例示したものである。以下、1回目の結果について考察する。

熟練者A、Bでは、右手①～③はX軸に対し約45°に手の甲の回転を伴いながら動いている。3回の軌跡は概ね一致していることから、決まった位置を往復移動しているとみなされる。左手はX軸に対して約135°方向に回転している。Aの左手は、前後にも動きがみられ楕円を描くように動

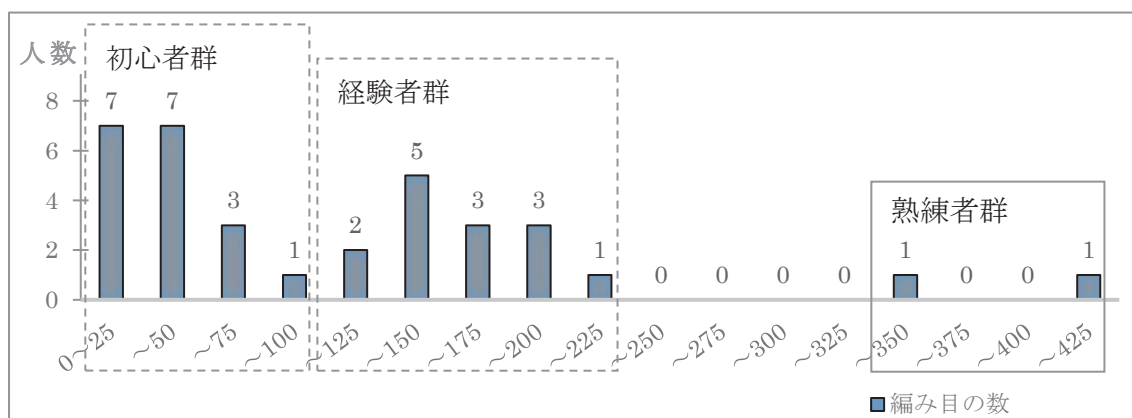
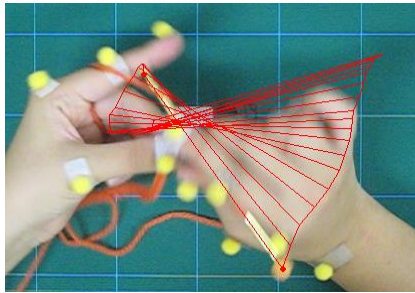


図5 5分間に完成したくさり編みの目数と人数分布



熟練者Aの例

被験者	針の回転角度(°)	
	1回目	3回目
A	72.0	
B	72.8	
a	30.2	58.0
b	53.9	49.1
c	30.8	23.0
d	66.8	38.6
e	55.8	71.8

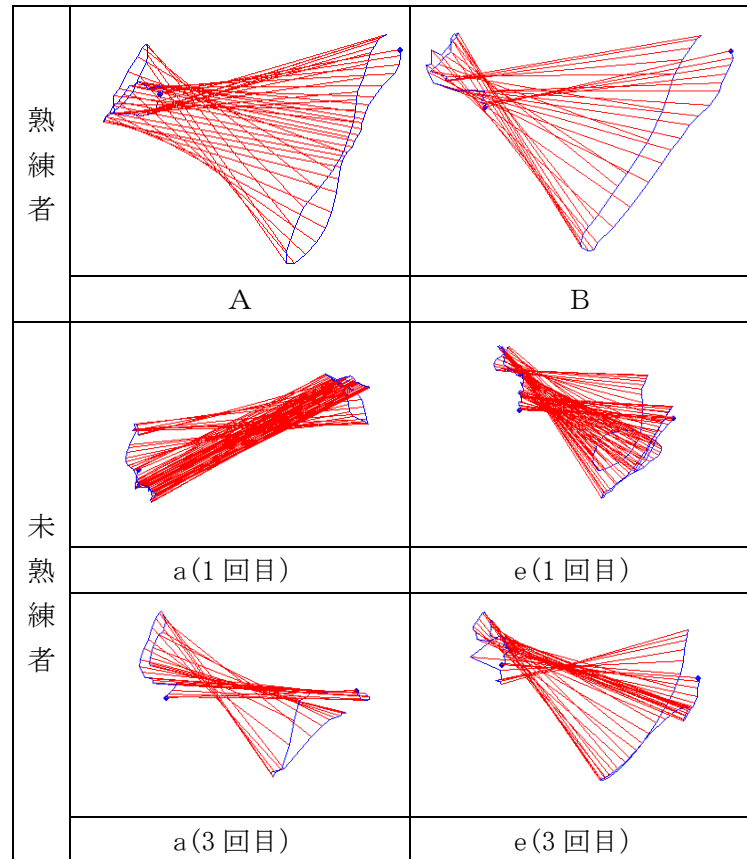


図6 かぎ針の軌跡の例および回転角度

くに対して、Bの左手は前後の動きは少なく、両者の動きに個人差がみられる。

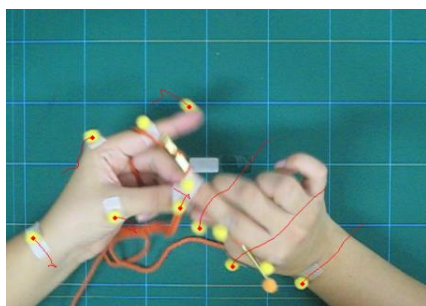
未熟練者aでは、右手の甲の回転は小さく左手の移動の方が大きい傾向で、右手の不自由を左手で補っているようにみえる。eにおいては、右手・左手ともに動きに傾向がみられず、右手の位置が安定せずもたつく様子が見受けられる。

図7の左下には全被験者の1目分の所要時間と右手平均移動距離の関係を示した。3目の時間を3で除したものを1目の所要時間、右手①～③の計測点における3目の総移動距離を9で除したものを平均移動距離とした。これより、1回目(■)の未熟練者aの所要時間に対し、eはやり直しによる移動距離が長い。c、bは熟練者(▲)と似た傾向であるが、熟練者は速度を落としていることをふまえると、熟練者のように右手が動いていないとみなされる。dは所要時間も移動距離も長い。このように未熟練者の右手の動きは少ないと考えられる。

3) 両手指の動きの共応性

両手指の動きの共応性を考察するため、①と⑦即ち両手母指の2点間距離を時間経過で図8にまとめた。図7で示したように1目分の所要時間の個人差が大きいため、3目の所要時間の百分率で時間(X軸)と移動距離(Y軸)をとらえた。この結果、熟練者と未熟練者(破線aとe)の両手の使い方に大きな差異が現れた。熟練者では針に糸をかけループを作る際に右手の甲を内側に回転させながら両手首が接近し、掛けた糸を引き抜いた時から離れていく。こうした動きが3回とも概ね規則正しく繰り返されていた。

一方、未熟練者の1回目(破線)をみると、aでは山がいくつも現れ、距離の変化も少なく動き



熟練者Aの例

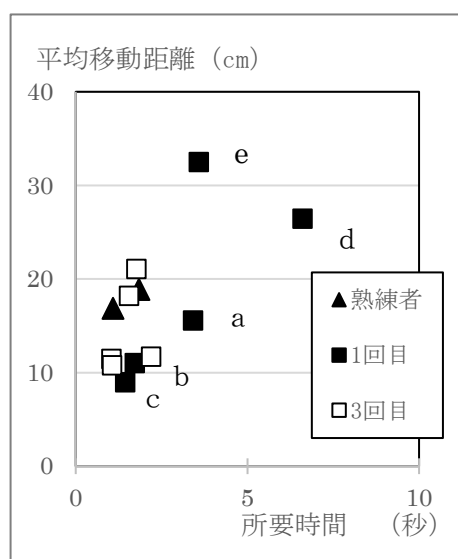
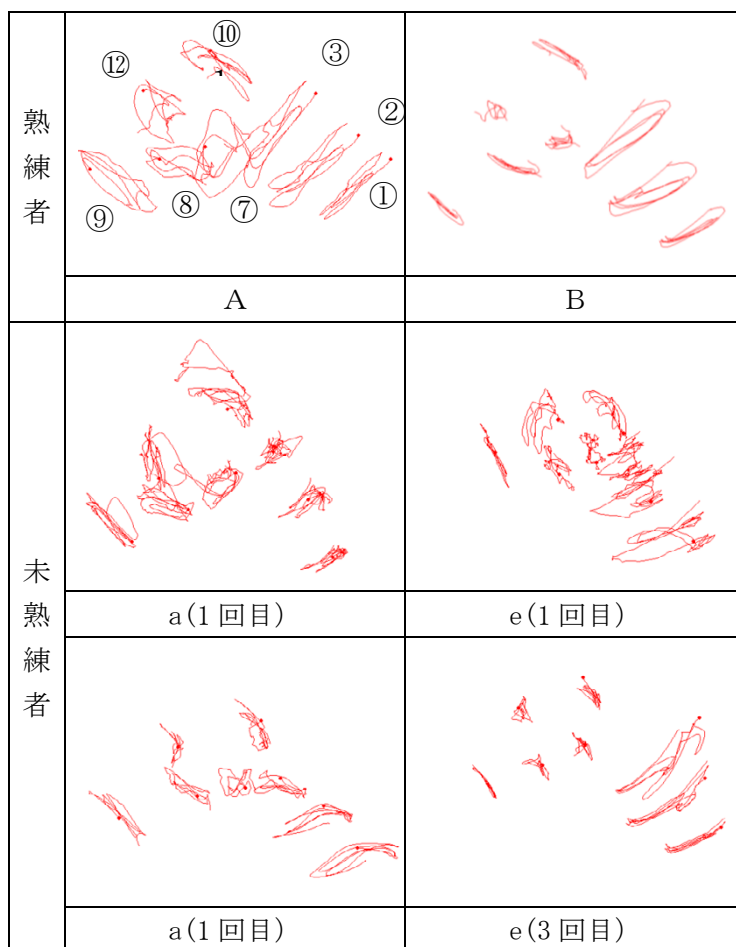


図7 左右手指の軌跡の例および所要時間と平均移動距離の関係



が小さく、針先のみを動かして糸をひき抜こうとしていた。eでは糸を引き抜く動作がうまくできていないため、山がいくつも現れている。

一連の観察より、未熟練者のかぎ針の動かし方には熟練者と明らかな違いが見受けられた。その他のこととして、かぎ針の持ち方が正しくない、針先へ糸を掛ける向きが逆である、左手にかけた糸の張りが強すぎるなどの様子も観察された。

(3) 未熟練者の上達傾向

1) 編み目の数

図9は、未熟練者の1回目、2回目、3回目のくさり編みの完成目数である。初心者のdは1回目に22目しかできなかったが、その後は順調に上達している。すべての被験者において練習によって完成数の上昇が確認され、3回目には全ての被験者で長編みもできるようになった。以上の結果は、短時間の練習により速度を上げて編めるようになることを現わしている。

2) 編み目の揃い

図10は、研究者によるくさり編みの目の美しさの目視判定(順位)と3目分の長さ5か所の値から求めた標準偏差(編み目の揃い)の関連を示したものである。▲は熟練者、■は未熟練者の1回目、■が2回目、□は3回目の結果である。目視判定の順位が高いものは編み目が揃う傾向で、

順位と標準偏差には有意な相関 ($r = -0.53$, $p < 0.05$) となった。初心者dは、1点(1回目の目数が不足のため標準偏差が算出できなかった)、2点(2回目)、3点(3回目)と最下位の順位とな

った。しかし、全体としては、練習によって目数が増え、編み目も揃う傾向が認められる。

3) かぎ針と手指の動き

図6の下段に示すかぎ針の動きからは、練習によって未熟練者のaとeでは3回目に回転角度が大きくなり、大きく針を動かしているようにとらえられるが、その他の3名(b, c, d)では角度がむしろ小さくなっている。この点からは、上達を結論づけるには至らないが、手指の軌跡からは一定の位置を往来する動きの傾向は認められる。また、図7左下より、□で示す3回目の所要時間は短縮され、時間当たりの移動距離も熟練者に近づきつつある。

さらに図8に示す両手母指の2点間距離からも、未熟練者の3回目(実線)には規則性のある山が現れており、右左の手の動きが共応して動いている。このような手指の動作傾向は全ての未熟練者にみられたことから、短時間の練習によってくさり編みの習得の兆しを示された。

2-3 題材の適性と指導の課題

編み物は簡単な道具と材料を用い場所を選

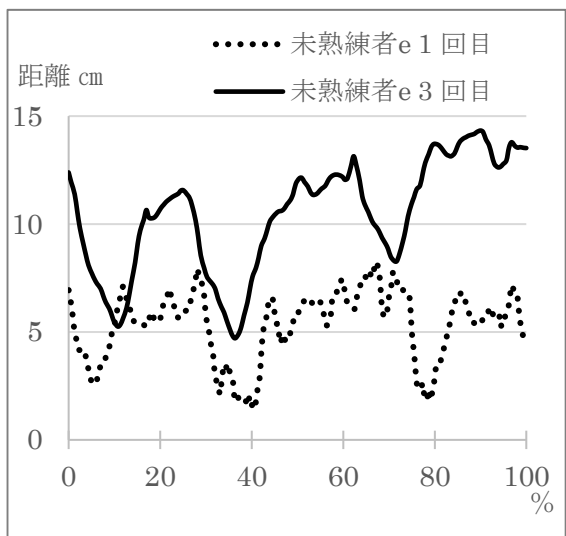
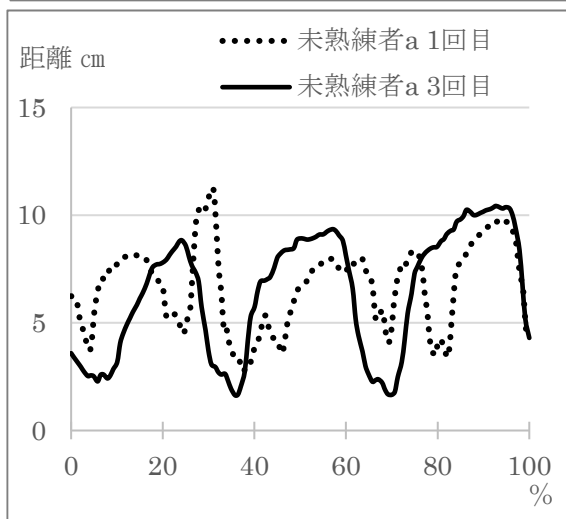
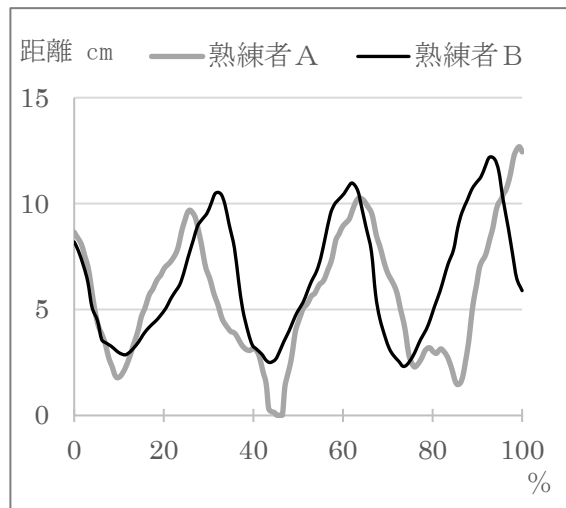


図8 両手母指の2点間距離

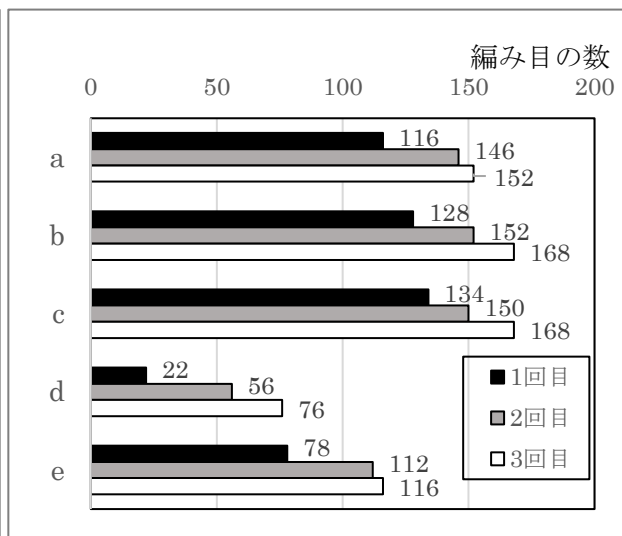


図9 練習によるくさり編みの完成目数の変化

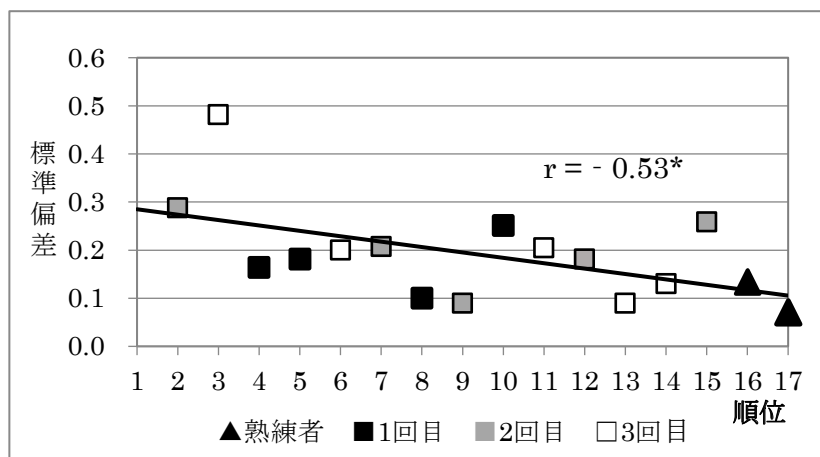


図10 くさり編みの目視評価と編み目の揃い

ばずできるため、学校での学習にも取り入れやすい。日常生活で手指を使う機会が減少し、ものづくり経験の少ない現代において、授業を通して編み物の楽しさを味わわせることは、手指の巧緻性を育むうえでも有効である。高齢者のリハビリに編み物を取り入れる、被災地において、裁縫や編み物などのものづくりを生活の自立支援とともに心の癒しや仲間づくりの機会とする活動¹¹⁾が報告されているが、若い頃の経験が基盤になっているのではないかと考えられる。

現代の中学生において編み物を経験しない者が6割に及ぶが、学習後に生徒たちの8割は楽しさを感じ、作品の出来ばえに満足を感じており、家庭科の学習が体験の機会になっていた。また、楽しい、おもしろい、だんだんできるようになる、達成感がある点で肯定的に受けとめており、生徒が学習効果を実感できる製作題材とみなされる。くさり編みでは8割がすぐ・割とすぐできるようになったと回答しているものの、細編みができる、編み目が揃う、リズムカルに編めるには時間がかかったとする生徒は4割程度いた。しかし、最後まで出来なかったと回答した生徒は最も多い項目でも1割強であることから、技能の習得意識は全般高いといえる。中学生がそれぞれのペースで取り組み、全員が作品を提出したことから、技能面からも中学生にふさわしいと結論づけられる。布を用いた物の製作学習の題材の選択肢として編み物を教科書への記載を提案するとともに、衣生活で高い頻度で使用されるニットの特性についても理解が深められると考える。

家庭科教員免許取得希望の大学生の意識より、経験することでより楽しさを実感している傾向がみられた。指導のためには教師自身が編み物の楽しさを感じ、技能を身につけていかなければならないが、かぎ針編みの技能レベルには個人差が大きく、経験がある者でも技能・知識は高いといえなかった。癖を正し、正しいやり方を教えた結果、短時間の練習でくさり編みは上達し、他の編み方もできるようになった。教員研修などの機会が得られれば初心者でも短時間で習得できると考えられる。

大学生の上達過程は中学生にも当てはめられると考えるが、目を揃え、リズムカルに編むことができなかったと回答した生徒がいる現実には目を向ける必要がある。編み物への否定的な内容に、難しい、できないが挙げられており、楽しい体験として印象づけるには技能習得が課題である。教師においては、色彩も含め魅力を感じさせるサンプルの提示、プリントの内容や編み方の示範に動画教材を導入するなど新しいやり方を採用して、クラス全体のレベルを向上させる、苦手な生徒への個別指導を充実させるためには生徒同士の教え合いを促すなど、指導の工夫が求められる。

4. まとめ

家庭科の教科書に編み物の記載はないが、中学生と家庭科教員免許状取得を希望する大学生の意識と実態からかぎ針編みをものづくり学習に取り入れる方向性について考察した。

結果は以下の通りである。

(1) かぎ針編みでアクリルたわしの製作学習を体験した中学生の多くは、編み物の上達とともに楽しさや達成感を感じとって、全員が作品を完成させた。

(2) 大学生が完成させたくさり編みの目数からは、指導できるレベルに至っていない者もいると推察されるが、手指の動作分析より、短時間の練習による上達が認められた。

(3) 編み物は中学生が学習効果を感じ取り、経験のない者も短時間の練習により上達が見込めることが明らかになり、編み物はものづくり学習にふさわしい題材の一つと考えられる。

謝辞

研究にあたり、調査に協力下さった中学生の皆さんと先生方および被験者の方々に心よりお礼を申し上げます。

付記 本研究の一部は、平成24年度埼玉大学研究機構プロジェクト研究によって行われた。本稿は日本衣服学会 第64回大会（2012年11月）と日本家政学会第65回大会（2013年5月）の研究発表に加筆したものである。

引用文献

- 1) 三輪聖子、辻康子、夫馬佳代子、西村敬子（2001）家庭科教育における被服領域の現状と動向—被服製作の実態と意識—, 153-159, 岐阜女子大学紀要30
- 2) 太田昌子、藤沢キミエ、井上絢子（1962）被服技能を測定する方法（糸結びテスト）について（第4報）まつりぐけ・表編み・くさり編みとの関連性について, 14-20, 家政学研究9(2)
- 3) 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編 文部科学省 63-65 (2008)
- 4) 伊澤優子（1999）中学校教材研究 生きる力を育む「ふる里学習材」の開発—「地球にやさしいアクリルたわしを作ろう」の実践を通して—, 97-106, 家庭科教育73(8)
- 5) 西村敬子、榊原洋子（1999）家庭科教材としてのアクリルたわし 81-88, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要第2号
- 6) 山本紀久子（2008）指ねじり編みによるアクリルたわしの教材化, 105-112, 茨城大学教育実践研究27
- 7) 梁瀬度子、大橋信子（1966）手作業の習熟に関する研究 III くさり編作業の習熟過程における未熟練者の手腕の動作分析について, 124-128, 家政学研究13(2)
- 8) 梁瀬度子、大橋信子（1965）手作業の習熟に関する研究 II くさり編作業における熟練者と未熟練者の手腕の動作分析について 74-78, 家政学研究12(2)
- 9) 日本ヴォーグ社ホームページ 編み方の基本 かぎ針編み, <http://www.tezukuritown.com/lesson/knit/basic/kagibari/index.html> (2012年10月アクセス)
- 10) 川端博子、鳴海多恵子（2012）刺し子学習の効果と指導に関する一考察, 248-257, 日本家庭科教育学会誌54(4)
- 11) NPO法人サンガ岩手ホームページ <http://sangaiwate.org/aboutus.html> (2015年4月アクセス)

(2017年3月16日提出)

(2017年4月17日受理)

Proposal to Adopt Knitting in Home Economics Study from the Aspect of Learning Consciousness and Progress in Skills

KAWABATA, Hiroko

Faculty of Education, Saitama University

NAKAYA, Toshihiro

Graduate School of Education, Saitama University

Abstract

Following the recent omission of knitting from home economics studies, its validity was examined from the aspect of consciousness and actual situation of the junior high students and the university students aiming to obtain license for home economics teaching. The results were as follows:

(1) Junior high students who experienced knitting the acrylic scrubbing brush work were able to feel progress in their crochet skills along with the sense of enjoyment and accomplishment.

(2) Estimated from the number of chain stitches accomplished by the university students, their crochet skills were not up to the standard for teaching. However, progress was observed after a short practice adopting motion analysis of the finger/hands.

(3) As a result, it can be concluded that knitting is one of the appropriate studying and learning experience for hand-making studies in which junior high students can feel the effect of learning and improve their skills through short practice.

Keywords: crochet, sense of accomplishment, motion analysis, progress, junior high student